

# 第三次世界大戦5

大陸反攻

大石英司

*Eiji Oishi*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

插  
画  
安  
田  
忠  
幸

## 目次

|                                      |     |
|--------------------------------------|-----|
| プロローグ                                | 11  |
| 第一章 マイモ・リーダー                         | 18  |
| 第二章 M R A P                          | 40  |
| 第三章 ダリーナ基地                           | 70  |
| 第四章 パンチボール                           | 97  |
| 第五章 <small>バシファイックシステム</small> 太平洋の嵐 | 126 |
| 第六章 不意打ち                             | 153 |
| 第七章 帰還                               | 182 |
| 第八章 スケアクロウ                           | 208 |
| エピローグ                                | 225 |

# 登場人物紹介

## 日本

### 《防衛省》

#### 〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうべい  
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易とされている。コードネーム：マウナケア。

#### 〔原田小隊〕

はらだたくみ  
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき  
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん  
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ  
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお  
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお  
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた  
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ  
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだいき  
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

#### 〔姜小隊〕

かんあやか  
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしぼらたけとみ  
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん  
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

いいかける  
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

みどうそうま  
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ  
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

かわにしまさふみ

川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ

由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしろう

小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら

阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま

赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

### 〔訓練小隊〕

あまりひろし

甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉の同期。

### 《陸上自衛隊 西部方面普通科連隊 (WAiR)》

しばひかる

司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官。朝霞で婦人自衛官の教育に当たれば一佐に昇進させてやると言われているのだが……。

### 《第一ヘリコプター団》

むらともり

村田護人 三佐。村田家次男。

むらたりんこ

村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

### 《海上自衛隊》

#### 〔海上幕僚監部〕

うえすきしんご

上杉慎吾 海将。海上幕僚長。

#### 〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさや

高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめやとしお

染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかねと

板東兼人 一佐。"かが"、艦長。

かねさか

兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

#### 〔第七航空隊〕

ふじわらみさ

藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36Aのライセンスももつ。

まじまけいこ

真島恵子 二佐。整備中隊を率いる。

くまかわたかし

隈川隆 三佐。第七飛行隊副司令。

### 〔インド洋派遣艦隊〕

ごみいさみ  
五味勇美 海将。連合艦隊司令長官。航空集団司令から、自衛艦隊司令を最後に退官。P-3C乗りで、藤原美沙の父親に鍛えられた。

えがわとしき  
江川俊樹 海将補。

たけうちこうすけ  
竹内幸輔 二佐。作戦幕僚。

### 〔ヘリ搭載護衛艦「ほうしょう」〕

いずみだせんえい  
泉田宣泳 一佐。艦長。

はしぐちはじめ  
橋口肇 二佐。副長。

みやぎあすか  
宮城明日香 一尉。気象班長。

### 〈航空自衛隊〉

#### （二〇二飛行隊）

むらたきさと  
村田先斗 二佐。F-35Aに乗る。村田護人、凜子の兄。

#### （民間軍事会社）

おとなしせいじ  
音無誠次 営門一佐。〈サイレント・コア〉の元隊長で、今は自衛隊退役者からなる民間軍事会社を立ち上げてその顧問となっている。偶然ハワイに来ていて巻き込まれた。

こぐれりゆうじ  
木暮龍慈 元一曹。狙撃手。音無の部下。二〇年前に自衛隊を引退してからは、北海道でマタギとして暮らしていた。コードネーム：ジャッカル。

## //// アメリカ //////////////////////////////////////

### 《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 國務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートの上司。

アマンダ・マクノート 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

### 〈海軍〉

#### 〔南シナ海派遣部隊〕

マイケル・ゴトー 中佐。南シナ海派遣部隊参謀。三代続く日系人。

## 〈陸軍〉

### 〔第25歩兵師団〕

デレク・キング 中將。元の師団長が負傷し、その後役職を引き継いだ黒人陸軍中將。別名：クラッシャー・キング將軍。

### 〔第25歩兵師団隷下 第4空挺旅団 “スパルタン”〕

クラーク・マッケンジー 中佐。大隊長。

カイル・バタスキー 中尉。第501落下傘歩兵大隊 “ジェロニモ、本部管理中隊付き偵察小隊を率いる。

トーマス・ワン 曹長。小隊を纏める補佐役。

マサミチ・ドウモト 伍長。

マック・キム 一等兵。韓国系。

ケイコ・ノックス 一等兵。

### 〔第7エンジニア・ダイブ分遣隊〕

ブルース・イノウエ 大尉。

ジミー・ボラード 伍長。

## 〈海兵隊〉

セリーヌ・D・タッカー 海軍少將。少將に出世したばかりの女性。

### （レジスタンス）

タケル・サトー 少佐。ハワイでルーカス・カトーのバイト先であるガンショップを経営。七〇歳を超えているが、銃の腕は確か。

チヨコ・サトー タケル・サトーの孫娘で、ルーカス・カトーの幼馴染み。

ルーカス・カトー ハワイ大学マノア校で機械工学を学ぶ青年。チヨコとの写真が “アラ・ワイ運河の恋人、として、全世界の注目を浴びる。

## 中国

### 《中央弁公庁》

ファンシュエマオ  
範 学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

## 〈陸軍〉

ウエイライシニン  
韋立新 少將。

ロンブワンフエイ  
龍 鵬 飛 少佐。世界の奇襲戦法が専門。日本のアニメオタク。

〔第一〇八特別監察旅団〕

ウビン リンカン  
武彬 林剛の元上官。彼をスカウトした。

リンカン  
林剛 中佐。

クオツモ  
陶子黙 一級軍士長。

〔第一〇一待機旅団〕

イエシュイトン  
葉旭東 少将。

トゥツ チイエ  
杜子健 大佐。参謀長。

チワンチュウファン  
程卓凡 大佐。政治将校。

リュウチチイアン  
呂志強 海軍予備役大佐。“シー・オブ・カシオペア、(一二五〇〇〇トン) 船長。

スットン  
蘇桐 中佐。情報参謀。

ツァイムウチン  
蔡慕青 中佐。女性部隊を纏める。

シモ  
石萌 少佐。元々はハワイ島攻略部隊の情報参謀だったが、負傷した杜子健大佐より参謀長職を託され作戦参謀兼参謀長代理になる。

チンユイタン  
金語堂 大尉。

クハオ  
顧浩 中尉。慎重な性格を見込まれ、金大尉に部下ごと引き抜かれた。

レンシュエチュン  
任学軍 曹長。

〈空軍〉

ファンシン  
方星 中佐。優秀な戦闘機パイロットだったが、数年前結核に罹り、それを機会にコクピットを降りていた。

ハオス  
郝思 中佐。護衛の戦闘機部隊を率いる。

///シンガポール///

クー・シェンロン 国防大臣。若く野心家で知られる男。

ウン・テクバ 外相。議会の古株で、滅多に感情を表に出さない男。

ネオファンファン  
姚芳芳 クー・シェンロン国防大臣の妻。香港人で元民主運動家。



第三次世界大戦 5 大陸反攻



## プロローグ

その昔、英海軍の基地があつたことから「アドミラル・シテイ」と呼ばれる香港・金鐘地区は、今夜もあの日のように賑わつていた。

若者たちの雄叫びが通りを支配し、二〇一四年の雨傘革命にあやかり、雨も降っていないのに、カラフルな傘を掲げる若者もいる。キャンドルやLEDランタンを持つ若者もいて、一見すると何かの祭りのようにも見えた。

だが、ハンドマイクを通じて聞こえてくる若者の演説は、あの時と同様、過激なものだった。

香港警務処機動部隊を率いる徐裕高級警司は、香港公園のそばに停めた警備指揮車のスモークド

ガラスの中から、そのデモの様子を見守っていた。なぜか郷愁を覚えてしまう光景だった。

ルーフの上からは監視カメラが出て、4Kカメラで群衆の様子を撮影している。サーチライトも点されていた。顔がはつきり認識できるように撮影することが大事だ。

彼の隣では、秘書兼副官の黎慧詩警長が、四〇〇ミリの望遠ズーム・レンズを装着した日本製カメラで、バシヤバシヤと群衆の顔写真を撮っている。

「うまいですよね、陸海榮のアジ演説は……」  
ジーンズ姿の黎警長がそう言った。

「まあ、演劇部だから、そりゃ演説はうまくて当たり前だろうな」

「珍しいですね。彼、自分から二重スパイを志願してきたんでしょう？」

「学費のためだそう。独立だのにはこれっぽっちも興味は無い。ノンポリだが、人前での演説には自信があるし、自分の言葉がどれだけ大衆に伝わるかも試してみたいらしい。だが、北京ペキンに睨にらまれて役者への道を閉ざされるのも嫌だから、情報提供者という形で自分を応援してくれと言っていたよ。その凶々しいところが気に入った。二枚目スターとして成功するかどうかはともかく、面白い役者になると思うね」

「……あんな若造が、ハリウッドで通用するのでしょうか」

「真面目なんだよ。本人は、ちょっと軽い性格を装ってはいるが、カリフォルニア風や東部エリ

ート風の発音をマスターするための語学学校にもちゃんと通っている」

「それで、国を捨てて出ていくんですよね。姚アウフアン芳芳フアンフアンのように……」

「おや、嫌いかね？ 彼女のことが」

「ええ。散々若者を煽あおり、独立を訴えておきながら、彼女の言葉に呼応して立ち上がったって逮捕された仲間を見捨てて、国外に逃げたんですよ？ 拳げ句、さっさと外国の政治家と結婚して……。私だって、彼女の演説に心を動かされた一人だったんです。てっきり地下に潜ったんだろうと思っていた彼女がひょっこりシンガポールに現れ、その時にはもう身籠もっていたなんて……酷い裏切りじゃないですか！」

「おかげで、中国は救われた。香港も独立せずにすんだんだ」

「彼女、シンガポールから失しっご踪したという情報が

ありますが、本当に戻ってくるんでしょうか？」

「まさか。失踪は事実らしいが、きつと騒動に巻き込まれるのが嫌で姿を消したんだろう。旦那は国防大臣——次の首相候補だ。しかも幼子までいる。そんな危険を冒す気はないだろう。彼女だつて、多くの若者を見捨てて、自分一人が幸せを手にしたという負い目はあるだろうからな」

機動部隊の制服警官、青いベレー帽を被っていることから「藍帽子」と呼ばれる集団が、一斉に行動を起こした。投石に備えて透明の盾を構え、群衆をかき分けて進む。軽トラツクの荷台に上つて演説していた陸海栄に演説を止めるよう命じ、激しいブーイングの中、彼を引き立て護送車の中へと連行する。

だが、機動部隊は、群衆を解散させはしなかった。時々、リーダーを引つ張り一線を越えるなど警告するのみ。適度にガス抜きをして、世論をコ

ントロールする。それが北京の香港政策の要なのだ。

暴走は許さない。締めるところは、しっかりと締める。その匙加減が、警察当局の腕の見せ所だった。

群衆に取り囲まれる前に、護送車が発進する。それを離れた場所で見守っていた指揮車も同時に発進したが、それぞれ別ルートを進んだ。

護送車は途中でビルの地下駐車場に入り、そこで自家用車に陸海栄を乗せ替え、アドミラル・シテイの官庁街にある警察本部近くのオフィスビルへと入る。

徐裕堅高級警司らは、その隣のビルの地下駐車場に入ると、地下道を歩いて、機動部隊の秘密の作戦本部へと向かう。

オフィスには、ほんの二十数名しかいない。徐が自ら選抜した精鋭部隊だ。二部屋ある取調室に

は鉄格子もマジックミラーも、鍵<sup>かぎ</sup>すらない。ゆつたりした構造の部屋で、ソファやコーヒースェット、三〇インチのテレビが置かれている。

徐が新しい副官を連れてドアをノックして入ると、汗の滲むTシャツ姿で椅子に座る陸海榮は、スポーツドリントクを立て続けに二本がぶ飲みしているところだった。髪の毛からは、まだ汗がしたたり落ちている。

「そのTシャツは、悪趣味だな」

徐はソファに座ると、くつろいだ雰囲気話しかけた。

「そうですね？ ただ、女性の表情をシルエットとしてプリントしただけですよ」

それは、演説中の姚芳芳の表情を模<sup>かたど</sup>ったプリントで、黒地の生地<sup>かたど</sup>に、表情部分が白く抜かれていた。ここ数日、香港で飛ぶように売れているのだ。

「どうでした、僕の演説は？」

「悪くなかったよ。特に『われわれは独立を求めているわけではない！』という部分が良かったね。三〇分の演説に二〇回も挟むのは、嫌味かもしれないが……」

「さすがにあれだけしつこく言えば、北京も文句は言えないでしょう。……スケアクローグは、僕の演説は嫌いみたいですけどね」

「気にするな。君の存在は、日を追うごとに香港の民主運動で大きくなっている」

「でも、いずれスケアクローグには暴かれるんじゃないですかね。僕が、北京のスパイだってことが」

「心配はいらないさ。それでも、大陸の人民は受け入れる。一三億もの民が、国のために尽くした君をスターとして受け入れるだろう」

「僕は、ハリウッドで有名になりたいんです。党

のご機嫌をとるだけの中華スターで終わるなんて、まっぴらですよ」

「何事も一歩ずつ、だよ。——聴衆の反応はどうだった？」

「それぞれ!! 明らかに、昼間より反応は鈍いですね。空母が日米の攻撃を退けたというニュースが効いています。中国人の士気は大いにながったでしょうが、香港人は明日にでも米軍が海南島ハイナンタオに上陸してくるものと期待してましたから。がっかりですよ!」

「君、本当に独立に興味はないの?」

黎が、疑わしげな態度で聞く。

「ええ。今や大陸からの投資は無視できない。それは香港だけでも暮らせるだろうけれど、今更一三億の同胞を無視して暮らすなんて、ナンセンスでしょう。みんな、噂してますよ。自由の女神にして香港のジャンヌ・ダルクが戻ってくる! そ

れを、スケアクロウグが大々的に発表するだろう!! ってね」

陸は、Tシャツのシルエットをつまんで見せた。「スケアクロウグは、本土派グへの支持を表明したことはないし、姚芳芳の名前を出したことも無い。独立だの民主化だのには、さして関心はないんじゃないか?」

「いいんですか? 民主化運動を取り締まるボスが、その程度の知識で、スケアクロウグこそ、政権に巣くう第五列、あれは、筋金入りの本土派ですよ」

「君の意見は?」

それを聞いた徐は、副官に尋ねた。

「スケアクロウグですか? 発言内容の真贋しんげんには関心ありません。ただ、われわれが正体を探っても暴けない謎の人物が存在し、政治の内幕や人事情報をリークしているのは、大問題です。黙ら

せないといけません」

「そうは言っても、われわれにとって最優先課題ではないし、サイバー空間のことは、香港の外の連中が対処している事案だ」

「僕、もう帰っていいですか？」と、陸が腰を上げようとした。

「今夜一晩、留置場に泊まったことにして、ゆっくり休むといい。声がかすれ気味だぞ」

「ありがたい！ 明日の演説の原稿を書きます。

晩飯は、出してもらえますよね？」

「ご褒美に、缶ビール一本も付ける。中華でもイタリアンでも、リクエストも聞くぞ」

そう言うと、徐は黎を促して廊下に出た。

「…… スケアクロウ」は、実は行政府の腐敗を摘発するために北京が送り込んだスパイだという説もあるみたいですが」

「なら、無理にその正体を暴くのはやめておいた

方がいいな。しかし、北京に与するようなことを書いているわけでもない」

「そこなんですよね。本土派かと言えばそうではないし、北京派かと言えば、それも違う」

「まさに虚仮威スケアクロウし、か」

「彼が登場した頃の文章を読み返してみましたが、そんな感じでしたね。大風呂敷おおぶろしきを広げた虚仮威しそのものでした。でも、その話には少しずつ真実が含まれていることがわかってくと、世間の注目が集まりはじめ。彼が、姚芳芳の帰国を宣言するなんて、確かに本土派が望む最高のお膳立ぜんだてでしょうね」

「姚芳芳と スケアクロウ」の間に、接点があるという情報はない。大衆の、ただの願望ねんぼうだな。真に受ける必要はないだろう」

二人はオフィスに戻ると、中央電視台が海軍司令部の発表を繰り返し流していた。大陸沿岸部



を航海中だった二隻の空母が、敵のミサイルを一発も漏れなく撃墜したことをだ。不鮮明ながらも、空母の上空で爆発したミサイルの痕跡の写真も公開される。また、ホノルル市内でのレジスタンスの攻撃が失敗し、大きな犠牲を払ったという海外メディアの報道も流されていた。

CNNは、レジスタンスの攻勢で二〇〇名が戦死し、輸送機の撃墜で三〇〇名もの兵士が戦死した。一晩で、アメリカ人五〇〇名もが亡くなったことを繰り返して報じているという。

大陸本土の人民はそれで沸き立っているようだが、香港人は逆だ。若者たちは共産主義の勝利に失望していたし、大人らは、また犠牲者を出したアメリカが、いよいよ本気になるだろうことを恐れていた。

おそらく、その予想は当たるだろう。

アメリカは本気を出し、中国は痛めつけられ、

共産党も解放軍も面子<sup>メンツ</sup>を失う。そして、ここ香港こそがわれわれにとつての「本土」だと信じる独立派<sup>立派</sup>本土派は、勢いづくことになるだろう。

徐裕堅は、間違いないと信じていた。  
姚芳芳の出番など、待つまでもないのだ。

## 第一章 マイモ・レーダー

南シナ海は、フィリピン方面で発生した熱帯性低気圧の影響を受けて時化<sup>しげ</sup>はじめていた。

それでも、空母<sup>も</sup>ほうしょう<sup>う</sup>（六七六九九トン）の巨艦の中では、揺れはほとんど感じられない。

夜に入り、艦隊防空を担うF-35B戦闘機が時々発進していったが、基本的に艦内は静まり返っている。そして、乗組員の心情も沈んでいた。何しろ、楽勝だったはずの日米両軍による空母攻撃が、あっけなく失敗したのだ。それは、誰もが全く想定しない事態だった。

自衛隊による攻撃が失敗したというならまだわ

かるが、米海軍や海兵隊による攻撃も失敗し、自衛隊機は幸いにも全機帰還できたが、米軍機は何機も撃墜された。しかも、見えないはずのステルス戦闘機が、である。その状況も、まだよく判明してはいない。

ここ数日、作戦は順調に推移していた。中国が南沙に築いた全ての人工島基地を破壊し、使える基地は航空基地として再利用している。海南島と目と鼻の先の西沙<sup>せいさ</sup>諸島の島二つを日本と米軍で占領し、陸上機の発進基地にもした。何もかもが、順調だった。

そして、ハワイで起こった悲劇の報復として、

日米の攻撃部隊が、沿岸部に潜む空母二隻を攻撃したが、飽和攻撃のミサイルは全て撃墜され、目的を達することはできなかった。

これは、中国軍のパールハーバー奇襲と、それに続く占領作戦以来、日米両海軍にとってはじめての挫折と言えた。

連合艦隊旗艦でもある「ほうしよう」には、米海軍や海兵隊のスタッフも乗り込み、作戦の調整にあたっていた。

連合艦隊の指揮を執るP-3C乗りの五味勇美海将は、夕食後のひとときを、士官公室に日米両軍の高級幹部を集めたお茶会の時間にした。

わざわざハノイの日系ホテルにチーズケーキを発注し、オスプレイを飛ばして運ばせた。全乗組員分は用意できなかったが、クルーへのお裾分け分ぐらいはある。

このお茶会に限り、五味は階級もハンモック・

ナンバーも関係無く、全員をバラバラに着席させた。それまでは、日米の隊員が綺麗に左右、階級席順に座っていたが、今は自由闊達な意見を述べられるよう、日米の軍人を隣同士に着席させたのだ。

そして、五味自らは末席に腰を下ろして紅茶を口にしていた。日本側にとって若干窮屈だったのは、その場の公式言語が英語のみだということだ。

「失敗の原因は、何だったんだろうな」

「飽和攻撃で仕掛けたミサイルの数が少なかったことは、明らかです。われわれはアンダマン海からマラッカ海峡へと航海中、二度にわたる中国の航空攻撃を退けましたが、その時中国軍が用意したミサイルの数は、おそらく一〇〇発以上です。それでも、指一本、本艦に触れられなかった。今回、われわれが用意したミサイルの数は、ほんの

一六発ほどでした。飽和攻撃には違いないのですが……明らかに、慢心があったのでしよう」

連合艦隊幕僚長の竹内幸輔たけうちさゆみ一佐が、英語で言う。竹内は、目の前に切り分けられたケーキを敵空母に見立て、身振り手振りを交えて話していた。

「それに、レーザー兵器の登場は想定外でした。中国がああ数のレーザー兵器を運用できるレベルにあったとは……」

「天気も、中国に味方したな」

「はい。せめて曇っていれば、半分は命中したはずです。日本側の反省点としては、P-1哨戒機も投入して、ハーブーン・ミサイルを撃ちまくるべきでした」

「そのP-1哨戒機を守る余裕は、うちにはありませんよ」

その会話に、F-35B短距離離陸垂直着陸（V／STOL）戦闘機部隊を率いる第七航空隊司令

の藤原美沙ふせわらみさ二佐が、さっさとケーキを平らげて加わる。

「なら、今後ロシア軍戦闘機なんて出てきたら、どんな戦術でくるのか」

「まだ確定ではありませんが、ロシア軍の戦闘機が参戦していたことは事実のようです。何機がどこから飛んできたのかは、現在、本国で調査中です」

米海軍を代表して乗り込んできたセリーヌ・D・タッカート海軍少将が発言した。彼女は、五味の隣に座っている。

「次は、曇りの日を狙い、今回の四倍くらいの数のミサイルを叩き込むしかないでしょうね」

「そのことなんだが、ひとつ提案したい。空母のことは、しばらく忘れてはどうだろう？ ロシア軍戦闘機の参戦は、新たな変数と言える。どのくらいの規模で、どこまで深くコミットして中国に

味方するのかわからない。一方、中国軍は、空母が健在とはいえ、それが有効に機能しているわけではない。われわれは事実上、この二隻の空母を湾口深くに追い詰めた状態で、デッキ上にも格納庫にも、肝心の戦闘機はいない。少なくとも、今現在の脅威ではないし、今後も脅威になる可能性は低い。滑走路を一本もつ陸上基地の方が、遙かに脅威度は高い。空母は、このまま圧迫し続け、安全に遂行できる作戦を考えるべきだ。敵をわれわれが支配するエリアまで引きずり出し、確実にその戦力を削っていく作戦を」

「そうなると、とるべき作戦は、ひとつしかないでしょう。陸上部隊を引き寄せ、航空部隊をこちらの勢力圏内まで引っ張り出すには、海南島に海兵隊を上陸させるしかないですね」

タツカート提督はそう言うと、海兵隊参謀のトミー・サントス大佐を見遣る。

「海兵隊上層部にも、オアフ島占領とバランスをとるためには、一刻も早く海南島に部隊を上陸させるべきだという意見はありますし、準備もしています。西太平洋に展開していた強襲揚陸艦は、兵員を満載し、ハワイではなく本艦隊との合流を目指して航海中ですので。ただ、自分はいくまでも航空部隊の参謀としてここにいるわけですし、陸兵の運用に関しては、大したサジェッションはできません」

「仮に海兵隊が海南島に上陸するとしたら、隣には、陸上自衛隊がいてくれるのかしら？ 私としては、それが気になります」

五味に対し、そうタツカートが質す。

「問題は、まさにそこでね。私はこう考えている。本来なら、わが自衛隊が再び中国大陸に出兵するなんて、まず、絶対に、あつてはならないことだ。理由が何であれ、ね。しかし、海兵隊が海南

島を占領したとしよう。基地はあらかた爆撃され、面子を失う他に、中国に戦略上の損失はない。北京は、それを見なかったことにして戦力の温存を図るかもしれない。しかし、そこに自衛隊がいたかどうか？ 日本刀を振り回す、野蛮な日本兵がね。——中国政府は、絶対にそれを黙認しないだろう。なぜなら日本軍との戦いは、人民解放軍の存在理由だからね。そのレガシーを守り抜くために、解放軍は一気に動くだろう。それこそ、後先のことなど考えずに。海兵隊が海南島に上陸しても中国軍が動かなかつた場合、自衛隊を上陸させる意義はある。日本政府が、それを認めるかという問題はあつたが、海兵隊が上陸して、中国軍が全く反応しなかつたとなると、あとは米政府と日本政府の交渉次第ということになる」

「なるほど、それは興味深いお話ですね。いずれにしても、空母攻略にさしたる戦術的利益がない

ことは事実です。そろそろ海兵隊に、本来の任務を担っていたたく時期かもしれません。前向きに検討しましょう」

艦が舵を切つたため、船体がわずかに傾いた。潜水艦の攻撃を躲すために、艦隊は之字運動を行つているのだ。

目下の脅威は低気圧ではなく、海面下の潜水艦だった。艦隊自体は作戦失敗に沈んでいたが、対潜部隊は、今も対潜作戦のまっただ中にいた。

「低気圧の影響を受けると、こちらの作戦にも支障をきたす。今後の作戦は、熱帯性低気圧の進路次第ということにもなりかねない。さらに制約が増えるだろう。潜水艦の脅威に、台風並みの低気圧。作戦の遅滞が発生すると、時間稼ぎも必要になつてくる。せめて、オアフ島の状況が少しでも好転してくれば、こつちも余裕が出てくるのだが……」

「それを言ったら、きりがありません。オアフ島での悲劇を一掃<sup>いっそう</sup>するための空母攻撃だったんですから」

藤原二佐がそう言ってきた。

「最近流行りの無人機で、ヘルファイアをちまちま撃つというわけにもいかない」

サントス大佐が、ため息交じりに弁解する。

「何しろ、ホノルルという大都市をまるまる人質に取られて、できることは限られているというのが軍の判断です。着陸途中の輸送機の撃墜は痛かった。せめて載っているのが戦車ならよかったのですが、運悪く兵士を満載していたとなると、責任問題に発展しかねない。レジスタンス部隊の犠牲は、表向き軍の責任ではないことになってはいませんが、ショックは大きい。しかし、派手な戦闘は回避しつつ、包囲網は着実に狭めています。今は、住民被害を最小に止めつつ、市の中心部を奪

還する作戦を練っている段階かと。立てこもっている敵は、手強いですよ。われわれは、フィリピンの戦線でも、現代のモスル奪還でもそれを学びました」

「戦争が長引くと、兵站<sup>へいたん</sup>の問題も出てくる。今は東南アジア各国の支援も得ているが、中国による切り崩し工作はあるだろうし、長引くようならいったん日本に戻っての整備補給の必要性も出てくるだろう。だが、国際経済への影響を考えると、戦争の長期化は避けねばならない。さっさとポイントを稼いで、中国を和平交渉のテーブルにつかせないと……」

「短期決戦が要であることは承知しています。しかし、空母攻撃の失敗は、準備不足が原因であることも明らかです。敵を侮り、拙速な作戦が失敗を招いたことは事実。反省点を検証し、確実な作戦を立てましょう。海兵隊の艦隊とは無事に合流

できるのかしら？」

サントス大佐へ、タックカート提督が尋ねる。

「問題ありません。護衛艦艇はほとんど付いていませんが、上空は空軍の戦闘機が守り、海面下は海自の哨戒機部隊によって警戒しています。もし中国が、ターゲットを本艦隊ではなく、海兵隊艦隊に振り向けるようなら、逆に迎え撃つチャンスです」

「しかし、仮にロシアの戦闘機が迎撃だけでなく、攻撃にも加わるとなったら脅威だ。こちらも慢心は禁物だな。……何か、明るいニュースはないものかな。せつかく陸上から美味<sup>おい</sup>しいケーキを取り寄せたのに、どうも暗い話題ばかりというのも辛<sup>いが</sup>」

「アラワイ運河の恋人<sup>シ</sup>たちは健在ですね！」

そう竹内が言うと、場が少し和んだ。

「報告はまだ受けていませんが、香港を巡る例の

作戦も、進行中のはずです。中国政府は、背中から味方に撃たれる羽目になるでしょう」

「早く、香港発のフラッシュ・ニュースを聞いたいものだな」

「それに、株価は若干持ち直したようです。昨日までわれわれが勝っていたということもあります。共産党政権が倒れた後、民主主義になればさまざまな貿易制限も撤廃され、財政運営の透明化も進んで中国経済は一層強くなる、そういう目算からのようですが」

「日本経済は、ますます飲み込まれそうだな。だが、民主化は歴史の必然だ。中国海軍と一緒に七つの海をパトロールできる時代がくるなら、大歓迎だよ！ いずれにしても、世界経済のためには、早く終わらせないと。——次の作戦は、熱帯性低気圧をやりすごした後になるかもしれないが、他に妙案がないかどうか、さらに検討してみよう。



当面は、敵潜水艦の発見と、自然の驚異をやりす  
ごすことに集中しないと」

「そうしましょう。——たいへん有意義な時間になりました。押し込まれているわけではないけれど、作戦がうまくいっていないと、心の余裕も消える。こういう時間をもつことは、大事だと思いましたが」

タッカー提督が、満足げな表情で発言した。  
本国は、次の作戦を急かしてくるが、時々立ち止まって振り返る時間は必要だ。

沿岸部に墜落した機体の回収も、考えなければならぬ。脱出して捕虜になったパイロットもいるが、どちらにしても、頭の痛い問題だった。

機密の塊かたまりである機体を海底から引き上げ、中国軍に奪われないためにも、さつさと海南島を占領すべきだという意見は少なからずある。

オアフ島で払った犠牲は大きい。だが、今西太

平洋上にいる海兵隊の戦力だけでは、いかにも心許ない。

海南島を占領する程度のことではできるだろうが、大陸からはいつでも万の陸兵を送り込めるのだ。そこが、ハワイとの違いだった。

ほうしよう艦内の第七航空隊のブリーフィング・ルームでも、ホテルから取り寄せたチーズケーキが振る舞われていた。

そこには、海南島の南にある西沙諸島、トリトン島基地に展開する航空自衛隊のF-35A戦闘機部隊を率いる第二〇二飛行隊長の村田先斗むらたさきともいた。彼は、攻撃失敗に関する情報をもつての訪問だった。

この場には、彼の弟で第七航空隊の村田護人もりと三佐もいれば、同じく妹の村田凜子りんこ一尉もいる。村田家の長男だけは航空自衛隊だが、今や陸自のへ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。